

## 報告 1

# フィリピン＝カトリック社会の歴史的形成をめぐって

池 端 雪 浦

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

---

はじめに

- 1 カトリック社会の形成
  - 2 フィリピン＝カトリシズム
  - 3 キリスト観の変容
- 

はじめに

本日は、「フィリピン＝カトリック社会の歴史的形成」という、ちょっと落ちつかないタイトルでお話をさせていただきます。このタイトルで私がお話し申しあげたいと思っておりますことには、要点が三つございます。最初にその要点について申しあげておきたいと思いますが、一つは、先ほどの寺田先生のご報告の際に統計（3頁参照）がございましたけれども、フィリピンという国はカトリック教徒が国民の圧倒的多数を占めている国である、ということです。しかし、このことは、単にカトリシズムが一つの世界宗教として布教された結果ではありませんで、スペインの植民地支配とともに、フィリピン社会にカトリック社会が形成された結果なのです。

したがいまして、スペインの植民地支配下におきましては、カトリシズムは単にフィリピン諸島の住民の精神生活を覆っていたばかりでなく、社会生活、あるいは統治行政に至るまで生活の万般を覆い、規制していた、そういう一つの総合的な文化の体系であったのです。例えて申しますと、ヨーロッパ中世のキリスト教社会、そうしたものが16世紀の後半から19世紀の末にかけてフィリピン諸島に存在した、ということです。20世紀に入りましてアメリカの植民地支配下で、つまり、政教分離を原則としているアメリカ体制下のフィリピン社会で、プロテスタンティズムが一つの宗教として伝道されたというのとは非常に質の異なる問題を含んでいたのです。ですから、最初の私の要点はこのフィリピン＝カトリシズムが持っている歴史的背景を明らかにすると同時に、このカトリック社会、つまりスペインの植民地体制下で形成されたカトリック社会というのはどのようなものであったのかということ、一つの原像として、プロトタイプとしてお話ししたい、あるいは提出したいということです。

それから2番目のお話の要点は、そうしたスペイン体制期のカトリック社会に定着したフィリピン＝カトリシズムというのはどういうものであったのか。先ほどの表現に重ねて申しますと、フィリピン＝カトリシズムの原像のようなものを提出したいということが第2の要点でございます。

そして、第3点は以上二つの論点といいたいまいしょうか、お話の柱とはいささか趣を異にするわけですが、そうしたいわば原像として私たちが捉えたものに歴史的なダイナミズム

を少し加えてみたい。一つの大枠としては理解できたフィリピン＝カトリシズムの内実というものが、歴史的な状況の変化のなかで、どういうふうに変化していったのか。信仰者の立場からいいますと、信仰者の宗教理解というものが歴史的状況のなかでどのような変化を見せてきたのか。こういう事柄を考えてみたいと思っているわけです。それが今日、私がお話ししてみたいと思っている事柄の要点であります。

### 1 カトリック社会の形成

それでは早速、第1の論点に入らせていただきまして、カトリック社会の形成ということをお話ししていきたいと思えます。お手元の略年表（資料1）にございますように、1565年、日本ではどういう時代に当たるかわかりいただけると思えますが、1565年という年にスペイン国王はフィリピン諸島の占領といいましょうか、征服事業を開始いたします。この時点から、フィリピンのスペイン植民地体制期が始まるわけですが、それは同時に、それ以前には何ら統一的な政治権力というものが成立したことがなかったこの地域が、一つの政治権力下に囲みこまれて、フィリピン諸島なるものが領域的に成立するという、そういう時点でもあったわけです。

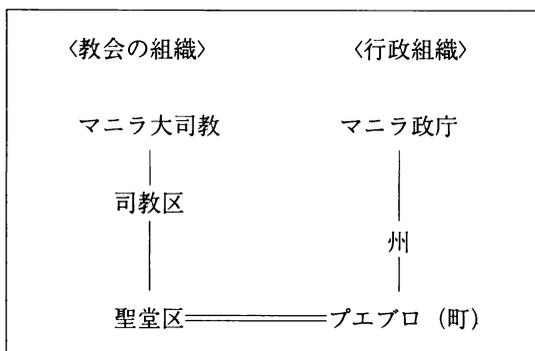
スペインがフィリピン諸島の征服事業に着手いたしました頃、新大陸などを含めた海外のスペイン植民地に対して、スペイン国王は世俗の統治権者、あるいは支配権者であると同時に、

[資料1] フィリピン史略年表

スペイン植民地期	1565	スペインのフィリピン占領が始まる
	1896	フィリピン独立革命の開始 (-1906年頃まで続く)
アメリカ植民地期	1898	アメリカがフィリピン革命に介入 (米西戦争) パリ条約によりアメリカがフィリピンを領有
	1935	フィリピン＝コモンウェルス (独立準備政府) 発足
日本占領期	1942	日本軍政が始まる
	↓	
共和国期	1945	
	1946	フィリピン共和国独立
	1962-65	第2バチカン公会議
	1972-81	マルコスの戒厳令体制期
	1986	「二月革命」

時のローマ教皇との取り決めに基づいてそこに設立される教会の実質的な統治者であるという立場を持っておりました。したがって、スペイン国王はフィリピン諸島の統治を開始するにあたって、世俗の支配体制と教会の統治体制とを相補的に用いて、相補い合う形で統治を展開しました。具体的に申しますと、スペインはフィリピン諸島の一定地域の軍事的な征服を完了いたしますと、そこに宣教師を送りこみまして住民の改宗事業を行ないました。そして、そうした改宗事業が完成いたしますと、資料2にあるような統治体制（組織）を設立したわけです。資料2を見ていただきますと、行政組織としてはフィリピン諸島全域を支配しているマニラ政庁が存在します。フィリピン諸島全域といたしました場合、ムスリムの居住地域である南部、大まかに申しますと、ミンダナオ島以南の地域は外されます。それを外したところのフィリピン諸島全体を統括する中央の行政機関としてマニラ政庁というものが設立されました。ついで、このフィリピン諸島はいくつかの州、プロビンシア（provincia）に分けられ、州はさらにいくつかのプエブロ（pueblo）、現在のムニシパリティですが、プエブロに分けられました。こういうようにして成立したのが資料2の行政組織です。

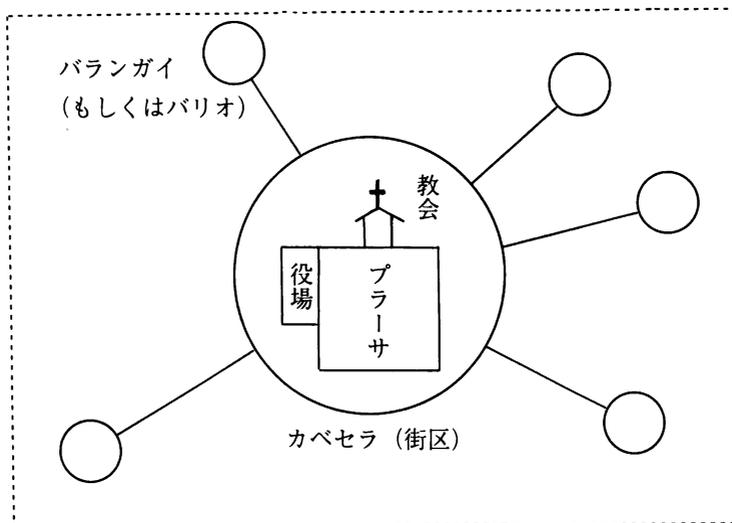
[資料2] スペイン植民地期の統治組織



同時に、教会の方では、フィリピン諸島で設立されたカトリック教会の頂点に立つ統治者としてマニラ大司教が置かれる。そして、マニラ大司教の統括下にフィリピン諸島は四つの司教区に分けられます。四つの司教区とは、まずマニラ大司教区。つぎにヌエバ＝セゴビア（Nueva Segovia）司教区、その司教座は最初はラロ（Lalo）にあったのですが後にはビガン（Vigan）に移りました。ルソン島の北部です。それからヌエバ＝カセレス（Nueva Caceres）司教区、これはルソン島の南の方でございます。現在のナガ市を中心にした司教区です。そしてセブ（Cebu）司教区という四つの司教区が設けられました。19世紀の中ごろに入ってパナイ島のハロ（Jaro）にもう一つの司教座が置かれました。ですから、19世紀の末期を考えますと五つの司教区があったということになります。司教区の下には聖堂区という、現在、私たちが俗にいう教区、スペイン体制期の言葉でいえばパロキア（parroquia）、英語でいいますとparishが設けられました。

資料2のなかで非常に大事なポイントは、世俗の統治組織であるプエブロと、それから教会の統治組織である聖堂区が、空間的にはほぼ重なりあっていたということです。世俗の統治組織、それから教会の統治組織のベースになるプエブロ＝聖堂区を多少モデル化いたしまして拡大したのが資料3です。これをご覧くださいますと、プエブロの全体が点線で囲まれて

[資料3] プエブロ＝聖堂区のモデル図



います。点線で囲んだというのは意味があるわけでありまして、スペイン体制下においては行政区画というのが実は実線で表わしがたいものだったから、スペイン体制期の行政区分の地図を描くことほど難しいことはありませんで、実線にならない。地形の測量ということは十分なされていなかったのです。そういう意味で大まかに点線でしか表現できないという、そういう含みがあるわけです。さて、このプエブロという単位は、旧来から、つまり植民地支配以前から存在した自然集落であるバランガイ (barangay)、スペイン体制下ではバリオ (barrio) という呼び方をいたしました。このバランガイをいくつか統合して形成されました。そこでこの諸バランガイの中の中心になるバランガイを、とくにカベセラ (cabecera)、あるいはポブラシオン (población) という名称で呼びました。もちろんフィリピンの人々はこれをタガログ語の場合はバヤン (bayan) というふうに呼んだわけですが。カベセラあるいはポブラシオンには世俗の統治の中心となる役場、当時はカーサ・トリブナル (casa tribunal) と呼ばれましたが、と教会が置かれる。この教会がプエブロ＝聖堂区の司牧の中心になる機関であります。

この二つの機関、つまり教会と役場とはプラサ (plaza) に隣接して建てられる。プラサというのは広場です。ですから、教会、役場、プラサという三つの公共建造物といいたいでしょうか、これらがスペイン統治体制下における統治のシンボル、あるいは統治の舞台になっていたということです。これらを総称してプラサ・コンプレックス (plaza complex) と呼ぶ研究者たちもおります。資料2に示したような行政単位と、資料3に示したようなプエブロの構成モデルというものは、現在でもフィリピン諸島にその原型をほぼ見ることができる。ですからフィリピンでは非常に早い時期から、今日につながるこの行政組織と教会の統治組織の基本的な構成ができあがったということです。

そこで、このプエブロ＝聖堂区でございますが、プエブロの世俗の統治には、当然のことながら町役場の役人達が従事いたしました。この役人には、フィリピンの住民が任命された

のですが、かれらの行政活動は実は教会に在住している教区司祭の全面的な監督下に置かれておりました。教会、あるいは聖職者はそういう形で植民地統治に直接に介入していたということです。また、プエブロの社会生活を見てゆきますと、それは教会の年中行事を中心に展開されておりました。プエブロの、あるいは聖堂区のと言い換えてよろしいわけですが、聖堂区の守護聖人、今でいうパトロン・セイント（守護聖人）のお祭りであるフィエスタ、それから例えばクリスマス、四旬節、そして復活祭、あるいはスペイン体制期には聖体の祝日というのが、特にフィリピンではさかんに祝われていたのですけれども、そうした教会の年中行事を中心にして、町の生活、プエブロの社会生活というのがあった。そして、この教会の年中行事を町ぐるみで、プエブロぐるみで祝っていくプロセスのなかで、いわば世俗の統治秩序であるとか、あるいはプエブロ社会の統合というものがより強化されるというようなことであったわけです。したがって、教会というのは単に聖堂区＝プエブロ住民の精神生活に大きく関与したのみならず、社会生活、さらには統治行政の具体的な運営にまで深く関わっていたということがいえるわけです。しかし、その反面、教会の布教活動、あるいは年中行事の運営は、プエブロの役人達の協力なしにはできなかった、あるいは効率的に運営できなかったのでありまして、そういう意味では教会の布教活動、司牧活動はまた、世俗の統治行政に関わっている人々の協力によるところが大きいという、そういう側面があったのです。このように世俗の統治行政に教会が大きくコミットし、その反面教会の布教、司牧活動に世俗の支配者、官吏たちが大きくコミットしているという、こういう相補的な関係がプエブロから、さらには州、そしてマニラ政府のレベルにおいても見られたのです。こうした聖俗あいまった統治体制が16世紀の後半から19世紀の末、厳密にいきますと1898年まで続くわけでした、厳密な引算をいたしますと、それは333年間にわたって継続したのです。

20世紀に入りますと、先ほども申しあげましたように、略年表（資料1）にある通り、フィリピンはアメリカの植民地体制下におかれます。それ以降、フィリピンの統治体制は政教分離の原理に貫かれていますので、聖と俗が相補い合う形での統治は原理的には廃止されたわけでありまして、しかし、原理的には廃止されたといいつながら、この333年間にわたって培われた聖俗一体化した形態は、その後もフィリピンの政治、あるいは社会生活の中に根強く残っているわけでありまして、その問題を抜きにしてフィリピン社会の宗教の問題、とりわけカトリシズムの問題を考えることはできないというのが、私が本日最初にお話ししておきたかった点であります。

## 2 フィリピン＝カトリシズム

次に2番目の問題に入りまして、それではスペインの統治体制下で定着したカトリシズム、フィリピン＝カトリシズムというのは、どのような特徴を持っていたのかということを考えてみたいと思います。時間の制約があってトップバッターが遅れますとたいへん怒られますので、かなりはしょって申しあげなければなりませんけれども、このスペイン体制下で定着したカトリシズムというのは、一般的には非常にフィリピン化されたもの、あるいは土着化されたものであるということが指摘されております。しかし、これは何もフィリピンに限ったことではございません。世界宗教というものが他の地域に伝播していく場合、その地域に旧来から存在した文化や、社会生活、あるいは社会組織の影響を受けて土着化するということは世界中ありとあらゆる所で見られる普遍的といってもよい現象です。私どもの多くが信

仰していると思われる日本仏教というものを考えてみれば、そのことはおおよそ想像いただけることだと思います。

ただ、フィリピンの場合に、フィリピン化という現象は他の地域に較べて、とりわけスペイン体制下においては、大きかったであろうと考えられる要素がいくつかあります。それはどうということかと申しますと、スペイン体制下で、とりわけはじめの二百数十年間に、カトリックの布教活動に従事したのは主としてスペイン人、部分的には新大陸から渡来したスペイン人の修道士でありました。したがって、その数は非常に限られていたわけです。つまり、伝道者の数が、スペイン体制期を通じてきわめて少なかったということが指摘されるべき一つの原因です。それから、また、フィリピンの人々の居住形態が都市に集中してはおりません、大方は自らが農業生産に従事しているバリオ＝バラングイの周辺部に居住していた。そういう事情で、限られた伝道者が、地域的に非常に拡散して居住する住民のなかで布教活動をしなければならなかった。こういった伝道上の障害に加えて、もう一つ言語の壁がありました。言語の問題は複雑です。フィリピンには多くの言語集団がありますから、伝道者がその土地の言葉を十分にマスターしていないことから生ずる問題が一方にあり、他方では、土地の言葉に十分習熟していても、フィリピンの言葉を使って伝道いたしますと、その言葉を使ったとたんに旧来の文化に新しい宗教がかすめとられてしまうという問題がありました。「ディオス」(Dios) という観念を、「神」という言葉で表現したとたんにそれは「神」になってしまうという問題があったわけです。ですから、フィリピン諸島の場合、「ディオス」といわないで、それを、もし、「マイ・カバル」(May-Kapal) というフィリピンの言葉で表現したとしますと、それは「ディオス」ではなくて「マイ・カバル」になってしまうという問題があったのです。外来の宣教師はこうした諸々の壁を越えなければなりません。したがって布教にあたっては、改宗に先立つ十分な宗教教育を施すことができないまま、洗礼を授けるというようなことがおきたり、伝道活動に宗教教育を十分に受けていない平信徒が参加してそれを助けるということがおきたりして、こうした条件が相重なって、旧来からフィリピンにあった信仰形態、精霊崇拜といわれるものや、フィリピン社会に固有の社会関係、あるいは社会組織などが、カトリシズムのなかに非常に根強い形で残ったということが指摘されているわけです。

そうした習合現象がどういう内容のものであったのか、ということをごここでは時間の制約上、細かくご説明することはできません。ですから、私は、その結果、フィリピン＝カトリシズムにどういった特徴が出てきたのかということをご二、三列挙しまして、もしご関心があれば、いずれフロアからのご質問をいただく時点で、また補いたいと思います。アニミズムとの習合という形で形成されてきたフィリピン＝カトリシズムの第1の特徴は、精霊信仰との類同性で、諸聖人への崇敬が非常に盛んなことです。もっと平たい言葉で申しますと、カトリシズムの諸聖人に祈願の祈りを捧げてそれをかなえてもらう、そうした諸聖人崇敬が大変盛んだということです。そして、諸聖人崇敬のなかでも特にマリア崇拜が盛んであるということが、2番目の特徴です。また、そうした現象の他に、やはり精霊信仰との絡みで、死者の霊や先祖の霊を慰める儀礼が非常に盛んだということもあります。それから、また、宗教の組織面に関わって申しますと、洗礼式においてたてられる代父母の制度を拡大した儀礼的親子関係、よくコンパドレ・システム (Compadre system) と申しますけれども、儀礼的親子関係がフィリピン社会の重要な社会組織を形成している点なども注目されます。その他

にも、フィリピン＝カトリシズムの特徴点はいくつかあげられるだろうと思いますが、それらはこれからご発表になる寺田先生や清水先生のご報告の中で、あるいは出てくるかもしれません。

さて、こうしたカトリシズムのフィリピン化ということを考えてみますと、確かに先ほど来申してきましたような布教にあたっての外在的な条件が考えられるわけですが、他方では宗教を受容する側の主体的な問題も無視できません。宗教は他者によって布教されるという側面があると同時に、それを受容する人々がこれを選択的に受け入れ主体的に理解する側面を含んでいます。ですから、フィリピン＝カトリシズム、あるいはカトリシズムのフィリピン化という現象を一般化して論じる場合、フィリピン住民が民族的規模で示した主体性の反映を十分考慮に入れなければならないと思うわけです。

### 3 キリスト観の変容

こうした主体的な受容の問題というものを、私はもう少し詰めた形で考えてみたいと、最近考えています。それが、本日の第3番目の問題として考えてみたい点であります。信仰者のおかれた歴史的状況の変化に伴って、外在的にいいますとカトリシズムの内実の変容、内側からの問題としていいますと、信仰者のカトリシズム理解の変容というようなことがおきているのだ、ということです。宗教現象を理解する場合、それを一つの原型、原像として理解することも確かに重要ですが、それが変化していく動態を考察することも重要だろうと思われれます。こういうことを申しますのも、私が他ならぬ歴史家であることに由来しているわけですが、そのような視角から私が、ここで例としてとりあげたいのはキリスト観の変容という問題です。キリスト教徒にとって、どのようなキリスト観をいだいているのか、あるいはどのようなキリスト像を持っているのかということは、きわめて重要な問題であろうと思われれますが、こうした問題を考察する場合、フィリピン＝カトリック社会を全体として考えることは、とうてい一人の研究者のないうところではございませぬし、アプローチの方法としても生産的であろうとも思えませぬ。

そこで私は、とりあえず考察の焦点を次のようなところにあててみたい。それは、ある時代状況を生きた人々の中で、その社会の改革とかその社会の下積みにある人々の救済といったようなことを真剣に考えていた人々、こういう人々に焦点を当てて、そういう人々の中でキリスト観がどういふ変容を見せたのかということを考えてみたいと思うわけです。実際、歴史の中でイエス＝キリストの姿を切実に追求したのは、他ならぬそういう人々であったと思われれます。そこで、まず最初に見ておきたいことは、スペイン体制期において、教会はどのようなキリスト像を住民に説いていたのか、ということです。これについて細かい資料的なことを申しあげる余裕はありませんので、ここではそれらを総合してまとめておきますと、教会が説いたキリスト像は、改宗したキリスト者が見習うべき模範的人間像としてのキリスト像であったということです。タガログ語で申しますと、アン・ウリラン・ナン・タオ (Ang uliran ng tao) とかアン・トゥララン・ナン・タオ (Ang tularan ng tao)、つまりタオ (人間) のトゥラランあるいはウリラン (いずれも範型の意) であるキリスト像が説かれたということです。

スペイン体制期にカトリシズムを、とりわけカトリシズムの世界観を体系的に提供した、いわばバイブルの代わりをしていた文献がありまして、それが資料4にある二つのパシオン

(pasyon) です。私は今、バイブルの代わりと申しあげましたけれども、フィリピンでバイブルがフィリピン諸語に翻訳されるようになったのは、プロテスタントイズムが導入された後の1930年代になってからのことです。スペイン体制期にはバイブルというものはなかった。バイブルなきカトリズムというものが布教されていた。スペイン体制期のバイブルはラテン語で書かれていたわけでありまして、聖職者といえども必ずしもバイブルを理解していたということではなかった。そこで、バイブルに代わるものとして、キリストの受難詩、つまりパシオンが書かれたのです。最初に書かれたパシオンは、アキノ＝デ＝ベレンのパシオンです。これは大変短いもので、内容的にも限られたものです。二つ目のパシオンはピラピル版パシオン (Pasyon Pilapil) とか、あるいは、今日はフィリピンの方もいらっしゃるので申しますと、パシオン・ヘネシス (Pasyon Heneasis) と呼ばれたもの、つまり創世記のパシオンといわれたものです。これは初版が1815年に出ておりますけれども、資料にあるように非常に体系的な一つのカトリズムの世界を表現するようなものであったわけですから、ついでに申しておきますと、その内容は、ある部分を除きますと使徒信経をパラフレーズしたようなものということができます、もしご関心のある方がおられましたら、これはフランシスコ＝ザビエルが香料諸島の一つ、テルナテ島で書いたクレドの詳細な説明書とその内容がほぼ重なり合うものです。ですから、カトリズムを世界的に布教していく一環としてこういうものがつくられたと見てよいと思います。そのパシオンの中でもイエス＝キリストというのは人間が見習うべき模範として描かれている。どういう意味において模範とすべきなのかといいますと、実はここが問題なのでありまして、早く書かれた方のパシオンでは、イエスというのは神の教えや命令に対して、絶対的に従順な生き方をする、そういう意味でキリスト者が見習わなければならない存在として描かれているわけです。それに対して、後の方のパシオンでは、イエスは非常に謙譲で穏やかな人柄、あるいは物事に動ぜずに忍耐強い人格の持ち主として、人間が見習うべき存在として描かれている。ついでに申しておきますと、後の方のパシオンでは、イエスの神性、神である側面というのがより強く出てきて、最初のパシオンと比較すると、イエス像というかキリスト像にかなりの違いがみられます。

ところが教会が教えたイエス像というのは、そういう教えであったにもかかわらず、スペイン体制後半期のフィリピン社会では、キリストをもっと違った形で捉える人々が現実には

#### 【資料4】 二つのパシオン

○アキノ＝デ＝ベレン版パシオン (初版1703年)

最後の晩餐 - 復活

○ピラピル版パシオン (初版1815年)

創世記 - マリアの生い立ちからイエス出産まで - イエスの幼少期 - イエスの宣教生活 - イエスのエルサレム入城から最後の晩餐をへて復活まで - 聖霊降臨 - マリアの死と被昇天 - コンスタンティン帝の母、聖ヘレナの十字架探し - 黙示録の世界

登場してまいります。例えば、1830年代から40年代にかけまして、南タガログ地方、これは後で寺田先生がご報告になる地域ですから、その時この地域がどこであるかをおわかりになると思いますが、このマニラの南に位置する南タガログ地方で、聖ヨセフ兄弟会、コフラディーア＝デ＝サン＝ホセ（Cofradía de San José）というのが組織されています。この組織は、教会から見捨てられた貧しい人々の現世における幸せと死後の魂の救済を追求した組織ですが、この組織の人々はタガログ語で非常にたくさんの書きものを残しております。それによりますと、かれらはパシオンに描かれたイエス＝キリストの具体的な生涯に自分たちの人生を重ね合わせまして、そこから彼らなりの一つのキリスト像を導きだしています。それはどういうキリスト像かといいますと、イエス＝キリストは貧しい大工の俵に生まれて富も社会的地位も学問もなかったにもかかわらず、何人にもまさる英知を授けられて真の福音を説き、当時の貧しいユダヤの人々の救済のために、時の宗教的権力や政治的権力と戦って受難した。しかし、最後に彼は復活して天国の永遠の栄光にあずかったというキリスト像です。言い換えますと、聖ヨセフ兄弟会の人々はキリストを、貧しい者の救済のために戦い、そして苦しんだ指導者というふうに理解したわけであります。こうしたキリスト観、今申しあげたようなキリスト観は、19世紀の中ごろから今世紀前半のフィリピンの民衆運動のなかに通底しているキリスト観であるということが言えると思います。

ところが、20世紀のアメリカ体制期に入りますと、もう一つ違った形のキリスト像が出てくる。それは、アメリカ体制期になると、インテリ向けの英語文学が書かれ始めるようになるのですが、その一方でタガログ語によるリアリズム文学も登場してきます。そうしたタガログ語のリアリズム文学の中の詩や短編小説では、フィリピンの社会に社会正義、カトゥイラン（katwiran）をいかに実現するかということが主要な関心事になってきます。そうした文学、私がどういった作家を具体的に頭に思い浮かべているかと申しますと、詩人のアウレリオ＝トレンティーノ（Aurelio Tolentino）とか、小説家ではファン＝アバド（Fuan Abad）とかロペ＝カ＝サントス（Lope K. Santos）とかいう人々を考えているわけですが、そういう文学のなかに出てくるキリストは正義を正義づける根拠として描かれている。つまり、キリストの名において正義が正当化される、あるいは不正が処罰される。そういうふうな形でキリストが描かれている。つまり、民主主義の名において正義を語る、あるいは社会主義の名において正義を語るというような、そういう社会正義が出現する以前の正義の根拠づけとして、イエス＝キリストの存在が文学の中に定着されているということが言えるだろうと思います。

そこで最後にお話ししたい事は、近年の文学にみられる非常に顕著なキリスト観の変化のことです。それは1964年頃から国語であるピリピーノ、これはタガログ語をベースにした言語ですが、国語のピリピーノで書かれた文学の中に出てくるキリスト像です。これは *Agos sa Disyerto*、日本語に訳しますと『砂漠の中の水』と題するアンソロジーや、*Sigwa* つまり『大嵐』という題のアンソロジーの中に結集してくる作家たちが描き出すキリスト像です。これらの小説で、ヘスース（Jesus）つまりイエス＝キリストと呼ばれる人物、あるいはヘスースになぞらえて造形されている人物は、社会のどん底にあえいでいる労働者、強権的な政治暴力に抗議してデモに参加して虐殺される学生、あるいは教会の前で物乞いをしている盲いた男といった、いずれにしても社会の底辺で苦しむ人々で、それが小説の中に描かれるヘスースなのです。彼らはいずれも社会のよこしまな権力の前に無惨な死を遂げるのですけれども、彼

らの死が周辺の人々を覚醒させ、そのようにして目覚めた人々がその非業の死を遂げたヘースたちの死の意味をかついでいく、担っていくというふうによりストーリーは展開していくわけです。つまり、60年代半ばから登場する社会派の作家の小説では、腐敗した社会を覚醒させ、救済に導くメシアとしてキリストが描かれているというふうに言うことができると思います。もちろん、それはイエス＝キリストをそのように理解し、そのようなメシアとしてのキリストに自己の人生をなぞらえたいと望む読者が、この60年代半ばからの激動期のフィリピン社会に、とりわけ都市の学生とか青年層の中に多数登場してきていたことを意味しているわけですね。

最初にお断りしましたように、この3番目の主題は、社会の変革といった問題に心を寄せている人々に焦点を合わせてたどってきたキリスト像の変容でありまして、これは決して一般論ではございません。昨今の様々な宗教社会学の調査結果が明らかにしておりますように、フィリピンのカトリック社会に多様なキリスト像、あるいはキリスト観が存在していることは、多少フィリピンのカトリシズムに関心を寄せられる方には、周知の事柄であります。しかし、私がこの問題をあえて本日、非常に大まかな形ではありますがありますが、歴史的に考察してみたいと試みしたのは、そうした現存するキリスト像の多様性というもの、実はキリスト像の歴史的層性（じやうせい）の問題でもあるということ、歴史家として指摘しておきたかったからであります。

#### 参考文献

- 池端雪浦. 1985. 「19世紀フィリピンの民衆カトリシズムー聖ヨセフ兄弟会の活動を中心にして」『アジア・アフリカ言語文化研究』30.
- 池端雪浦. 1987. 『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房.
- Javellana, Rene B. 1983. "A Historico-Critical Study of the Tagalog Pasyon of 1814: Casaysayan nang Pasióng Mahal ni Jesuchristong Panginoon Natin Sucat Ipag-alab nang Puso nang Sinomang Babasa," M.A. Thesis, Ateneo de Manila University.

#### 質疑応答

成相：カトリック教会の神父です。鹿児島におけるフィリピン人のお世話をしております。非常に興味深かったのは、二つのパシオンにおけるキリスト像、そのなかでも最初のキリスト像は為政者にとって非常に都合のいいキリスト像だと思いました。そして、後からのキリスト像は、本当に民衆の中に、一番初めは押しつけられたもの、与えられたものだったのを、主体的につかみとったキリストが民衆の中に動きだしたという、そういう感じを受けたのですけれども、これは正しいのでしょうか。

池端：私は全くそういうふう理解しております。

成相：どうもありがとうございました。